様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：８４６０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2018
課題番号：２６８２０２７９

研究課題名（和文）荘厳化を目的とした建築装飾に関する研究

研究課題名（英文）Research on the architectural decoration for solemnization

研究代表者
大林　潤（OBAYASHI, JUN）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員

研究者番号：４０３７２１８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：奈良県下の重要文化財等の物件について、修理工事報告書より建築装飾の関する情報を抜き出し、データベースを作成した。このデータベースでは、各物件に対し、収集した画像をリンクさせ、個別に画像を表示させる機能も備える工夫をおこなった。
　装飾の題材に関しては、寺院建築で多く採用されている霊獣に関する図像学的表現について検討し、個々の図像がそれぞれ、決まった特徴を有しているが、その特徴は時代によって変化していることを明らかにした。また、これまで各建築で特定されてきた図像に多くの誤りがあり、特定の際には、図像学的特徴を精査する必要があることを明らかとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で作成したデータベースは、今後事例を増やしていくことによって、これまで全国で行われてきた文化財建造物の修理工事現場での装飾要素の特定と事例収集作業において実際に活用されることが期待できる。また、図像の特定に関しては、特定のための視点を提示することができ、建築の荘厳化が、単に華やかにすることが目的なのではなく、装飾によって空間の性格を意味づけていることを改めて明らかにした点に学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Information about the architectural decoration was extracted from the repair work report for properties such as important cultural properties under Nara Prefecture, and a database was created. In this database, I have devised a function to link the collected images to each property and display the images individually.
About the subject of decoration, I will consider the iconographic features of mythical creatures, and each individual figure has certain characteristics, but these are changing by age. In addition, it was revealed that there are many errors in the identifications, and it is necessary to scrutinize the iconographic features when we identify the figures.

研究分野：建築史

キーワード：建築装飾　荘厳化　霊獣　建築彫刻

様　式　C－１９、F－１９－１、Z－１９、CK－１９（共通）

1. 研究開始当初の背景

建築装飾に関する研究は、保存修理工事にともない個別の事例を詳細に調査した成果が蓄積されつつある。しかし、それらの詳細なデータも十分に追加された状態とは言えず、実際の保存修理工事現場や復原研究では活用できるデータとして整理されていないのが現状であった。その主な原因として、1) 装飾の要素が手法、部材、材料など多岐にわたるうえ膨大であること、2) 時代性･地域性が強く影響すること、の二つがあげられる。

修理工事現場では、修理前にはすでに失われている部材を補うため、新しく部材を追加することが多いが、その際には類例の調査が不可欠である。しかし、上記の理由で資料が十分に集められていない状況下では、現場ではまず資料の収集から開始せねばならず、事業が進む中では非常に難しい作業であると同時に、その場で検討された内容が、次の調査研究に活用されにくいという問題も指摘できる。したがって、これらの情報を整理し、装飾要素を現場で検討するための指標が必要であると考え、本研究を計画した。

2. 研究の目的

日本における寺院建築を中心とした宗教建築では、仏教儀式をおこなう本堂を含めた伽藍中心施設には、極彩色を施したり、錺金具を取り付けるなどの建築装飾による荘厳化が通常行われており、その装飾技術は寺院建築のみならず、神社建築や宮殿建築にも取り入れられてきた。本研究では、これらの荘厳化の具体的内容について、現存遺構･文献資料･絵画資料などの事例を総合的に分析し、荘厳化の内容を整理し、それらの情報が実際の保存修理現場で活用できるための基礎情報の一つとなることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 建築装飾データベースの作成

これまで刊行されている文化財建造物の修理工事報告書より、装飾に関わる部分を抽出し、その技法、年代、材料などの項目を整理し、データベースを作成した。

(2) 装飾要素に関する主題の検討

荘厳化を目的として主題性のある建築装飾の事例を調査し、主題の特定と配置について検討した。事例調査として、法隆寺金堂（奈良県斑鳩町）、新勝寺（千葉県成田市）、日光東照宮（栃木県日光市）の調査をおこなった。

4. 研究成果

(1) 建築装飾データベース

本研究では、建築装飾に関する基本的情報の収集が重要であり、その後の作業を進めるため基本となる作業であった。当初計画では、奈良県内の事例から開始し、進行状況次第では近畿圏まで範囲を広げる予定であったが、研究代表者の出産等による中断があり、奈良県内の事例収集のみをおこなった。また、当初学生アシスタントを用意し、資料収集作業を常時行う予定であったが、上記による研究中断と、学生アシスタントが予定よりも確保できず、結果として、奈良県下の修理工事報告書すべてを網羅することはできなかった。最終的に収集したデータは全 54 件、画像数 1175 枚、修理工事報告書 38 冊分となった。

データベースは、filemaker pro を使用し、以下の項目に関して入力をおこなった。

①塗装…仏画の有無（来迎壁、四天柱、小壁、壁、天井）
文様の有無（内陣、外陣、天井、外部、向拝、組物）
単色の種類（丹塗･丹土塗、朱塗り、弁柄塗、黄土塗、緑青塗、白緑塗、胡粉塗、墨塗）
漆塗り（漆塗り、すき漆、箔押し）

②彫刻…部材（蟇股、虹梁、組物、妻飾、欄間、藁座、木鼻、大瓶束、笈型、懸魚･桁隠し、手狭、蓑束
技法（透かし彫り、浮彫、丸彫り、籠

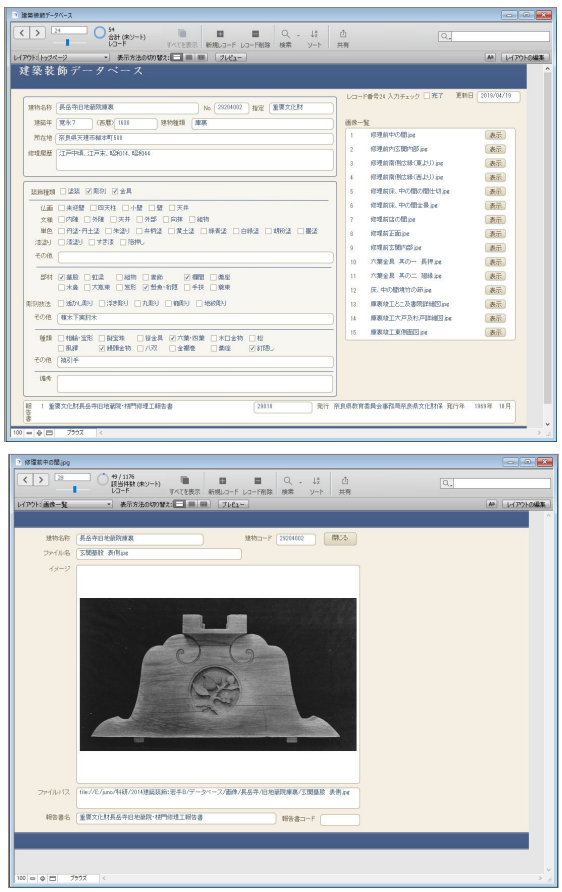

図 1　建築装飾データベース画面

彫り、地紋彫り）

③金具…種類（相輪・宝珠、擬宝珠、笹金具、六葉・四葉、木口金物、枢、風鐸、饅頭金物、八双、金蘭巻、藁座、釘隠し

このデータベースでは、各物件に対し、収集した画像をリンクさせ、個別に画像を表示させる機能も備える工夫をおこなった。今後も継続してデータの収集に努め、実用的なデータベースの構築を目指したい。

（2）装飾要素に関する主題の検討

装飾の主題を特定するために、その題材が歴史的にどのような認識でとらえられたかをいう視点で装飾の図像的特徴を整理し、主題の特定をおこなった。

①主題の図像的特徴

寺社建築の装飾の中で、殆どの装飾で使用される題材として、霊獣がある。霊獣は、自然界に存在しない架空の動物である。本研究では、白象、獬豸について検討した。

白象は、「和名類聚抄」には「似水牛、大耳長鼻、眼細牙長者也」と、具体的な姿が説明されており、おそらく経典や仏像などを通じて大陸から伝わったと考えられる。実際には、実在する動物の「象」としてではなく、縁起の良いもの、仏法を守護するものと考えられており、霊獣のひとつである「白象」として認識されていたとみられる。図像的特徴は、鼻が長く、牙があり、体毛はなく耳が垂れ、目は細く三日月形である。同じく鼻の長い霊獣である獏と混同されることが多いが、獏は目が大きく丸く、全身に毛があり、胸部が蛇腹であることが多く、以上の点を見ることで象と区別することが可能である。また、彩色が施されていればより見極めは容易で、獏は全身を青や黄色等で塗ることが多いのに対し、象は「白象」であるため、全身を白く塗られていることが多い。多くの文献でこの二つの混同が見られることも明らかとなった。

獬豸（かいち）は、霊獣のひとつで、中国から伝わったものである。古くから霊獣として知られていた獬豸であるが、図像としての特徴は一定ではない。本研究では、「延喜式」、「営造法式」、「三才図絵」、「和漢三才図絵」等の資料に記されている図像的特徴を整理した。その結果、文献や類書に登場する獬豸は、その年代によって微妙に図像的特徴が異なっており、特徴を定義することは難しいことが明確となったが、どの文献でも、頭部に一角があることが共通しており、多くは獣足で、たてがみがある姿で描かれていることがあきらかとなった。

以上のように、各図像には特定するための視点があり、その特徴を細かく整理することで、どのような題材が採用されているのか明らかにすることが可能である。ただし、その図双的特徴には年代による変化があり、実際に図像が描かれた（彫刻された）年代における図像の特徴を、事前に整理しておく必要がある。今回取り上げた象と獬豸の例では、象に関してはその年代的変化は少ないといえるが、獬豸は著しく異なるため、注意が必要である。今後、他の図像に関しても事例を集め、その年代的特徴を明らかにしていきたい。

図 2　「和漢三才図絵」獬豸

②現存建築における装飾主題の特定

上記の検討と並行して、現存の建築遺構における装飾主題の特定をおこなった。対象とした建築の概要は以下のとおりである。

・法隆寺金堂…奈良県斑鳩町

法隆寺金堂は、2 重の本堂建築で、上重の四隅に軒の垂下防止のための支柱が後世に付加されており、柱には龍の彫刻が取り付いている。また、初重の四隅にも獣型の彫刻が置かれており、これらは元禄の修理時に追加されたことが明らかとなっている。この獣型の彫刻について、昭和大修理時に刊行された修理工事報告書では、「東北隅の象、西北隅の獅子は大体想像できるが、他は明らかではない。強いて名付ければ東南隅は麒麟、西南隅は狻猊（さんげい）か獬豸とでもなすべきであろうか。」とある。今回図像を精査したところ、東北隅の象、西北隅の獅子は修理工事報告書のとおりであるが、東南隅は麒麟、西南隅は獏であることが明らかとなった。

・新勝寺光明堂…千葉県成田市

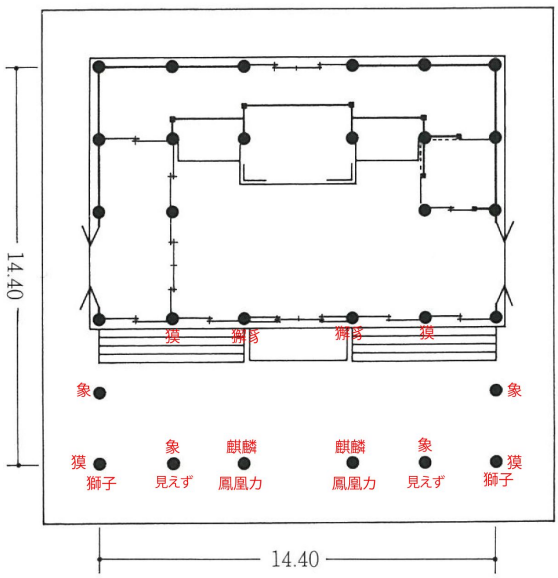

図 3　新勝寺光明堂彫刻配置図

光明堂の建築についてはこれまでまとまった解説文は刊行されておらず、彫刻については、19 世紀中ごろに現在位置に移築された際に付加されたものであると伝えられているのみである。

光明堂の装飾のうち、柱頭部に付加された懸鼻の彫刻の題材について検討した結果を図3に示す。これを見ると、すべて霊獣であり、獏と象は、建物内部にも外部にも使用されていることがわかる。欄間には天人の透かし彫りがはめ込まれており、仏教の世界観を表現するために、これらの題材が選ばれていることは明白である。中央間に鳳凰、麒麟、獬豸が選ばれている理由については、今後、他の建築との比較によって明らかにしていきたい。

このほか、栃木県日光市の日光東照宮の建築などの現地調査をおこなった。これらの成果は、今後論考としてまとめる予定である。

5. 主な発表論文等

〔その他〕

ホームページ等

奈文研ブログ：コラム作寶樓「白い象」

https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2018/04/20180409.html

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。